

第十四章 文化史学の領域

文化から過去を理解し説明する文化史学

我々は過去を裁くことができるのか？ヨーロッパ人による新大陸征服の端緒となったコロンブスを、新大陸に天然痘などの病気を伝え、現地住民の大量死を招いたこと、新大陸を金や銀の搾取対象としたこと、奴隷制を導入する切っ掛けを提供したこと、ヨーロッパに対する新大陸の苦難の従属の歴史の幕を開いたこと、などの廉で非難できるのだろうか？勿論、それはできるが、その非難は過去を変えることにはならない。過去に対する評価を変えるだけである。

つまり、コロンブスは15世紀のヨーロッパ人が持っていた文化を基準として行動したのである。黄金への欲望、キリスト教への絶対的信念、香辛料とアジアへの憧れ、ヨーロッパに存在していた身分制の意識、スペイン国王と交わした契約とその履行の義務、……。それが楽天的な西欧化・近代化・文明化でないことは言うまでもない。

同様に、マゼランが世界周航を企てた事業も地球が球体であることを単純に証明しようとしたと片付けられるべきものではない。当時の文化によって動機付けられ、その行動が彩られていたのである。

彼はプトレマイオス以来の西欧の知的文化の伝統の中で育まれており、地球を実際よりはかなり小さく見積もっていた。東回りでアジアに到達する距離は知られていたが、西回りの距離は知られていなかった。また当時の船舶がせいぜい百トン程度の小型船でしかなく、積載できる食料等に限界があることも、長期にわたる航海でビタミンCの欠乏により壊血病が生じることも知られてはいなかった。

彼は何よりもモルッカなどで生産される胡椒などの香辛料を求めていたのである。黄金よりも高価に取引される香辛料。そこには香辛料を消費する西欧の文化があった。そしてフィリピンに辿り着いたとき、彼は現地住民にキリスト教を広めようとし、武力でそれを強制しようと試みたのである。それは新大陸の各地で見られた既視体験済みのことであった。しかしこれはマゼラン個人の問題というより、西欧の文化の問題であったというべきだろう。

つまり、15世紀の西欧という世界での文化という視点で15世紀から16世紀の航海者たちの行動を見ると、彼らがやってしまったことは容易に理解できるし、評価できるのである。すべての人間の行動や思考はその人間個人の文化のみならず、個人が育まれてきた時代や社会の文化に動機付けられ、規制されている。

文化史における現在と過去の関係

歴史が「現在と過去との対話」であるというカーの言葉はよく知られているが、このことは現在の価値観が絶対で、過去の価値観がそれに劣るということの意味している訳ではない。大事なことは、現在は過去から生み出されてきているが、現在が過去を裁くといったものではなく、現在と過去の違いを認識するということ、そして現在と過去のそれぞれの独自性を評価するということである。

同時に同時代の中の文化に優劣はないということも心しておかねばならない。それぞれの文化は過去の伝統と現在の文化環境に対する適応の産物だということである。

文化翻訳と文化史学

文化の流れに優劣は存在しない

ローマ化とアメリカ化

かつては地中海沿岸に都市が建設されるとローマ化と評価されてきた。確かに中心にはフォーラムがあり、神殿やローマ風の劇場、剣闘技場、バシリカや公共浴場、時には水道橋がそれらの都市には見られた。また神殿はアウグストゥスやその時々々の皇帝を崇拜し、ユピテルやユノーなどのローマの神々が祭られていた。さらにはラテン語による碑文があちこちに設置され、人々の目に触れるように展示されていた。またこれらの都市は **minicipium** や **colonia** などのローマ都市としての地位を示す名前を冠していた。

それが故に、これらの都市の出現と発展をもって「ローマ化」の証と主張できるのだろうか？よく見るとこれらの都市はイタリア半島に見られる都市と微妙に異なる点も目に付く。ユピテルやユノーなどのローマの神々の名前に、ガリア系の神々の名前がアトリビュートとして付けられたり、バアルなどのフェニキア系の神々の名前が付いていたりして、どこか違う。ガリアでは神殿がこれらの都市とは全く違うところにあったり、北アフリカではかつてのフェニキア時代の神殿の上に作られていたり、ユピテルとバアルのように雷という点で共通する要素を持っていたり。

私たちはこれらの現象を単純に属州にローマの先進文化が移植されたと評価するのではなく、帝国の政治的中心地の文化が属州民の「翻訳」という行為によって再構築されたとみた方が適切である。ローマ文化のコードからいろいろな点で逸脱しているケースが見られるからである。

アメリカのベースボールが日本に紹介され、野球に翻訳されたことはよく知られている。ベースボールを野球と翻訳したのは中馬 庚（ちゅうまん かなえ）と言われ、明治 27 年（1897 年）のこととされる。その野球が完全に日本化されており、アメリカのベースボールに似て非なることはよく指摘されている。ある種の精神主義が強調され、ホームランは勿論、ヒットが評価され、シーズンオフの練習が重要視され、個人プレーよりはチームプレーが大事にされる。これは日本がアメリカに征服され、その文化を強制的に移植されたのだということを意味しない。むしろ、日本人がアメリカのスポーツを輸入し、日本人好みに色づけし、日本の文化に合わせていったと言うべきであろう。

つまり外来の文化を「文化翻訳」を通して自分たちの文化の中に違和感を感じさせることなく、取り込んでしまう、このような行為が過去から現在まで行われてきたし、また行われようとしている。京都の町を歩いていると、よく家の中から『般若心経』を唱える声が聞こえてくるし、有名なお寺に行くと、観光客が『般若心経』の写経をしている光景を良く目にする。

しかし仏典は何故「アヴァローキテーシュヴァラ・ボーディサットヴァ・チャルヤーム・チャラマーノー・ガンビーラーヤーム・プラジュニャー・・・」とサンسكريット語で読まれず、漢字テキストで、それも中国語ではなく日本語読みの感じで読まれるのか？「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄。舍利子。色不異空、空不異色、色即是空、空即是色。」は有名な『般若心経』の冒頭部分であるが、これを日本語による漢字の読みで「かんじざいぼさつぎょうしんはんにはやはらみたじ、・・・」と読んでいくのである。日本語としてはこのままでは意味を成さない。「智慧をもって観照され、自在の妙果を得られた菩薩（観音菩薩）様が、深遠なる「智慧の波羅蜜」を行じられていた時に、人間の肉体と精神を構成する五つの要素は

空であると見抜かれて、あらゆる苦悩から解放されたのです」、というような意味なのだが、そのような意味があるということをあまり意識してお経を唱えているという風ではない。

そして一種の呪術的な意味を込めて唱えられる場面に遭遇することもある。或は一日の始まりのけじめとして唱えられることもある。或は亡き人との会話を行っている人もある。そして言えることはこのように使われるということも「文化翻訳」である。

リュディアとギリシアの事例

リュディアではギリシア神殿風のファサードを持つ墓を作っているが、ギリシアでは神殿の建物が墓に使用されることはない。神の領域と死者の領域は絶対に区別される。しかしリュディアではこのようなコードは適応されない。同じようなことはエトルリアで複製されるギリシア風の壺と壺絵についてもいえよう。彼の地で作られる複製品はギリシア風であることが求められ、厳密なギリシアコードで作られることは求められていないのである。日本での結婚式の例を見てみよう。新郎新婦は蝋燭をもって披露宴の会場に入り、出席者のテーブルにある蝋燭に火を点して回るが、これも西欧のスタイルを真似たのであって、蝋燭を点すという行為と披露宴との必然的な関連はない。

文化に優劣なし

ここで忘れてはならないのは、文化の発祥の地での文化コードが守られていないからと言ってその文化を受容した地が文化的に劣っているということにはならないということである。つまり、古代日本が中国から都城制を導

入したからと言って、その都城に羅城という町を囲む城壁がないからと言って古代日本が劣っているということにはならない。文化史学は各時代、各社会の文化を一つの価値基準で序列化していくことはしない。それぞれの文化の歴史と文化環境の枠組みの中で評価していく。歴史と文化的伝統、文化環境が異なれば受容された文化が「独自の発展」を遂げていくのは当たり前である。